

# 「資本論を読む会」便り

No. 19・20号  
2017.3.22

今年最初の例会から、新たな参加者がありました。議論がより活発になり一層充実した「読む会」になることを期待します。

さて、アメリカでトランプ新大統領が就任し2カ月が経ちます。TPPの脱退など保護主義を掲げていますが、どの程度のものになるのかはまだ分かりません。保護主義が必ずしも自国資本の利益となるとは限らないからです。

保護主義の対極は自由貿易です。保護主義や自由貿易を私たちはどう理解し評価したら良いのでしょうか。資本論でも言及されていますが、資本主義はどのように運動しどのように社会を変えていくか、そうした理解が不可欠ではないかと思えます。

※ 今号を19・20合併号とさせて頂き、1月と2月の「読む会」の報告をいたします。

※ 小見出し直後の丸ゴシック体は、本文やレジュメを要約したものです。本文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落初めの数語と、段落番号を付けています(本文の字下げごとにカウント。大月書店 全集版資本論)。

## ★第3節 C 一般的価値形態

|            |   |             |
|------------|---|-------------|
| 1着の上着      | = | } 20エレのリンネル |
| 10ポンドの茶    | = |             |
| 40ポンドのコーヒー | = |             |
| 1クォーターの小麦  | = |             |
| 2オンスの金     | = |             |
| 1/2トンの鉄    | = |             |
| その他        | = |             |

### 一 価値形態の変化した性格

【第1段落】 「いろいろな商品はそれぞれの価値を…」

一般的価値形態における価値表現の特徴

- (1) 単純である。
- (2) 統一的である。

すなわち、一般的である。

というのは、いろいろな商品の価値を一つの商品で表しているからです。

【第2段落】 「形態ⅠとⅡはどちらも、ただ、1商品の…」

形態Ⅰ(単純な価値形態)と形態Ⅱ(展開された価値形態)における価値表現の特徴

どちらも1商品の価値を、商品自身の使用価値(現物形態)とは違ったものとして表現していることです。

報告者は、第3段落、第4段落にそれぞれ両形態の特徴が記されているので、この段落は

なくとも良いのではないかと説明しました。

これに対してKさんから、第2段落は、第6段落で説明されている形態Ⅰ・Ⅱと形態Ⅲとの本質的な違いを示唆している段落であるとの指摘があり、確認されました。

**【第3段落】 「第1の形態は、1着の上着=20エレのリンネル、…」**

形態Ⅰ、すなわち単純で偶然的な価値形態における商品価値の表現は、

1着の上着=20エレのリンネル

10ポンドの茶 =  $\frac{1}{2}$  トンの鉄

のように個々の商品によってその価値表現が違っており、上着の価値と茶の価値が、価値として同じものであることを表現しているようには見えません。つまり、価値として統一的な表現を持っていないということです。

段落後半の、この価値形態が現れる歴史段階について論議になり、結論的には、共同体内部で偶然的に余った採集・狩猟物が、共同体間で時折り交換されるような歴史段階を指しているとなりました。具体的に、原始時代ではといった意見や、縄文時代ではないか、という意見もだされました。

**【第4段落】 「第2の形態は第1の形態よりも…」**

冒頭の

第2の形態は第1の形態よりももっと完全に1商品の価値をその商品自身の使用価値から区別している。

の意味について質問がありました。

形態Ⅰでは、上着の価値は、別の1商品のみを使用価値で表現されていました。

それに対して、形態Ⅱでは、上着以外のすべての商品の使用価値で表現しています。

それゆえ、

商品価値の諸表現の無限の列の内に、商品価値はそれが現れる使用価値の特殊な形態には無関係だということが示されている…。(Bの1 展開された価値形態 の第1段落)とあるように、形態Ⅱは、商品の価値と使用価値が形態Ⅰより区別されていることを示しています。

次に、形態Ⅱは、諸商品の共通な価値表現を持っていないことが確認されました。

というのは、この形態では、諸商品の価値表現において相対的価値形態にある商品が等価形態から排除されています。そのため、諸商品の価値を表現している等価形態が共通な内容になっていないのです。

**【第5段落】 「新たに得られた形態は、いまではその商品自身の…」**

形態Ⅲ(一般的価値形態)では、「商品世界から分離された一つの同じ商品種類」つまりリンネルが、すべての商品の価値を表現しています。したがって、すべての商品は価値として同じものであることが表現されています。

このことは、どの商品も、自分自身の使用価値から区別するだけでなく、一切の使用価値から区別して、自分自身の価値を表現していることになります。価値は、すべての商品に共通なものとして表現されているといえます。

そして、形態Ⅲが初めて、現実に諸商品を互いに価値として関係させます。すなわち、形

態Ⅲは、諸商品を質的に同一で、量的に比較可能にし、かつ諸商品を交換価値として、価値の現象形態として価値を目に見える形で関係させます。

**【第6段落】 「前のほうの2つの形態は、商品の価値を、…」**

**形態Ⅲにおける相対的価値形態の変化した姿の、質的考察のまとめ**

形態Ⅰと形態Ⅱ

商品の価値を、ただ一つの異種の商品よってであれ(形態Ⅰ)その商品とは別の多くの商品によつてではあれ(形態Ⅱ)、一つ一つの商品ごとに表現します。(20エレのリンネル=1着の上着、20エレのリンネル=10ポンドの茶など。)

両形態ともリンネルが、自分に一つの価値形態をあたえることは、リンネルの私事としての能動性であり、他の商品は等価物という受動的な役割をしているだけです。

形態Ⅲ(一般的価値形態)

リンネルで価値を表現するすべての商品は能動的に、しかも共同して自身の価値をリンネルで表現しています。したがって一般的価値形態は商品世界の共同の仕事になるのです。

ある商品が生まれながらにして一般的等価物になるわけではありません。すべての商品が、共同して、自分たちの価値を同じ等価物(リンネル)で表現することで、リンネルは一般的等価物になります。新たに現れるどの商品種類もリンネルによって価値を表さなければなりません。こうして、商品世界全体がリンネルによって価値を表現することになります。

すべての商品はリンネルによる価値表現以外の価値表現を持たず、諸商品の価値対象性は諸商品の全面的な社会的関係によつてのみ表現されることになります。

諸商品の価値形態はただ社会的に認められた形態でなければならないということが、この一般的相対的価値形態においては明瞭に現われているのです。

ここまでが第19回(1月)の内容です。以下は第20回(2月)です。

**【第7段落】 「リンネルに等しいものという形態では、…」**

**一般的価値形態は、すべての商品の価値量が比較され得る形態である**

形態Ⅲ(一般的価値形態)においては、すべての商品は、量的に比較されうる価値量としても現れている。

例えば

10ポンドの茶=20エレのリンネル

40ポンドのコーヒー=20エレのリンネル

∴ 10ポンドの茶=40ポンドのコーヒー

というように。これはまた、価値実体=労働の量としても比較されうる。

形態Ⅲでは価値の量的側面が明瞭になっている、ということだと思います。

**【第8段落】 「商品世界の一般的な相対的価値形態は、…」**

- ・一般的な相対的価値形態は、商品世界から除外された等価物商品(リンネル)に、一般的等価物という性格を押しつける。
- ・リンネルの現物形態がこの世界の共通な価値姿態 → 他のすべての商品と直接交換可能。

- ・リンネルの物体形態は、いっさいの人間労働の  $\left. \begin{array}{l} \text{目に見える化身} \\ \text{社会的な蛹} \end{array} \right\}$  となる。
- ・リンネルを生産する私的労働(織布)
  - 一般的な社会的形態(他のすべての労働との同等性の形態)にある。
- ・一般的価値形態をなしている無数の等式
  - 織布を人間労働一般の一般的な現象形態にする。
- ・商品価値に対象化されている労働
  - 労働の具体的形態と有用的属性とが捨象されて、消極的に表わされているだけでない。
  - 商品価値に対象化されている労働自身の積極的な性質がはっきりと現われる。
- ・その、積極的な性質とは。
  - 商品価値に対象化されている労働は、いっさいの現実の労働が、それらに共通な人間労働という性格に、人間の労働力の支出に、還元されたものである。

「社会的『蛹化』」の「蛹化」について議論になりました。蛹になったという意味ですが、最初、次のような対応があるとの説明がありました。

|    |           |       |
|----|-----------|-------|
| 卵  | 単純な価値形態   | (形態Ⅰ) |
| 幼虫 | 展開された価値形態 | (形態Ⅱ) |
| 蛹  | 一般的価値形態   | (形態Ⅲ) |
| 成虫 | 貨幣形態      |       |

しかし、形態ⅠやⅡについてどこかでそのようなことが書かれているわけではなく、このように言うと言い過ぎだろう、ということになりました。

一般的価値形態の次は貨幣形態ですが、これは価値形態の完成形です。金が貨幣となって登場するわけですが、形態Ⅲのリンネルとは姿・形がまるで違います。これらの例えとして形態Ⅲを蛹としたのだろう、という指摘があり、これで落ち着きました。

「消極的」と「積極的」についてすこし議論がありました。上記要約の後半部分です。人間労働一般、あるいは、抽象の人間労働が、

「労働の具体的形態と有用的属性とが捨象されて、消極的に表わされている…」  
 というところです。ここでは、労働から具体的形態と有用的属性とが捨象された残りが、人間労働一般なので、その意味で「消極的」と言っていると思われます。

「積極的」の方はどうでしょうか。あらゆる商品が、ただ1種類の商品＝リンネルで価値を表現するので、これを「積極的」と言っているようです。

商品どうしのこの共同作業によって、「商品価値に対象化されている労働は、いっさいの現実の労働が、それらに共通な人間労働という性格に、人間の労働力の支出に、還元」しているということなのでしょう。

#### 【第9段落】 「諸労働生産物を無差別な人間労働の…」

一般的価値形態は、それ自身の構造によって次のことを示している。

一般的価値形態は商品世界の社会的表現である。

一般的価値形態は、次のことを示している。

商品世界の中では、労働の一般的な人間的性格が労働の独自の社会的性格となっている。

ここでは「労働の独自の社会的性格」のイメージがなかなかつかめない、ということで議論になりました。

どの商品の生産も、直接には、私的に行われています。ですが実際には、社会的性格を持

たされます。というのは、他の商品と交換されなければならないからです。例えば、自動車メーカーが自社の自動車をたくさん倉庫に抱え込んでいたら倒産します。

したがって、商品を生産する労働は私的でありながら社会的性格を持たされることとなります。このことを「労働の独自の社会的性質」と言っているのではないのでしょうか。

「商品世界」における労働の関係について、工場内の労働の関係と比較する説明がありました。ある工場のA課では部品Xを、B課では部品Yを、C課では部品XとYから製品Zを生産しているとします。この場合、A課もB課もそれぞれ部品XとYを商品として生産し、C課に売っているわけではありません。生産計画に従って、部品XやYが必要な数量を必要な期日までに生産し、それをC課で使うわけです。工場内という小さな社会ですが、各課で行う生産労働は、(工場内の)社会的労働です。ここは「商品世界」ではありません。

メモ不足で説明を正確に再現できないのですが、編集人はこのように理解しました。

## 二 相対的価値形態と等価形態との発展関係

【第1段落】 「相対的価値形態の発展の程度には…」

相対的価値形態の発展の程度には等価形態の発展の程度が対応

相対的価値形態の発展の程度

—対応・結果→ 等価形態の発展の程度

この対応は、次の第2段落で述べられています。

【第2段落】 「1商品の単純な、または個別的な相対的価値形態は、…」

相対的価値形態の発展と等価形態の発展の対応

形態Ⅰ 1商品の単純な、または個別的な相対的価値形態

他の1商品を個別的等価物にする。

形態Ⅱ 1商品の展開された相対的価値の形態（すべての他の商品での1商品の価値表現）

他の多数の商品を、いろいろな違った種類の特殊等価物にする。

形態Ⅲ 一般的価値形態

ある特別な商品種類が一般的等価形態を与えられる。

（すべての他の商品がこの商品種類を自分たちの統一的な一般的な価値形態の材料にするから）

【第3段落】 「しかし、価値形態一般が発展するのと同じ程度で、ト…」

相対的価値形態と等価形態の対極性の発展

価値形態一般が発展するのと同じ程度で、相対的価値形態と等価形態との対立もまた発展する。

この対立の発展の内容は、次の段落以降で説明されます。3月の例会で検討しましょう。

※ 編集人の都合で、いろいろ検討したことや議論をうまくご紹介できませんでした。申し訳ありません。以後、頑張ります